

愛えがお顔



感動ものがたり

（800字の感動を愛媛から）

愛媛県

愛顔^{えがお}とは？

人と人との助け合い、
支え合いの根底にある「愛」と、
困難にくじけることなく挑戦し、
道が開けた時にこぼれる「笑顔」が
結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛顔^{えがお}あふれる愛媛県」を
目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

このたび、「愛の顔」と書く「愛顔^{えがほ}」という言葉からイメージされる感動のエピソードを募集したところ、全国から1, 807作品もの応募をいただき、誠にありがとうございます。

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」を全国に広く発信することで、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るとともに、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげていこうと実施したものであり、平成二十六年度が初めての取り組みにもかかわらず、予想を上回る応募をいただき、大変うれしく思っております。

皆さんの作品は、芥川賞作家で「千の風になつて」の作曲家である新井満さん、本県出身の新進気鋭の俳人である神野紗希さん、私の3人が最終審査を行い、知事賞・特別賞をはじめとする受賞作20作品を選考させていただきました。

知事賞に選ばれました埼玉県 瀬戸桃子さん、特別賞に選ばれました大阪府 石原一志さん、そして、優秀賞、入選、佳作にそれぞれ選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。受賞作品をはじめとして、どの作品も本当にすばらしいものばかりで、選考に大変苦慮するとともに、たくさんの「愛顔」と「感動」が詰まった物語の数々に心を動かされました。

今回、受賞作品を冊子としてまとめさせていただきました。この作品集が多くの人々に読まれ、「愛顔」の輪が全国に大きく広がることを強く願っております。

終わりに、応募いただきました皆さまをはじめ、本事業にお力添えを賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「知事賞」	生きるチ・カ・ラ	瀬戸 桃子 (埼玉県)	4
「特別賞」	最初の思い出・最後の思い出	石原 一志 (大阪府)	6
「優秀賞」	賢者のおもてなし	村岡 大二 (埼玉県)	8
	ばあば三人 安芸の旅	井上 弘子 (愛媛県)	10
	Bad day	三好 洋平 (愛媛県)	12
「入選」	愛顔で生きてゆく	黒川 康子 (静岡県)	14
	まあちゃん	西崎めぐ美 (大阪府)	16
	それぞれの高校野球	田村 直巳 (愛媛県)	18
	生き続ける言葉	大沼 菜摘 (東京都)	20
	長女の手紙	正岡 智子 (愛媛県)	22
「佳作」	カーネーション	中村千代子 (香川県)	24
	不器用な母の「おもい」	やのひろみつ (高知県)	26
	Happy Car	佐々木良子 (東京都)	28
	なみだの愛顔	森 惇 (青森県)	30
	体温	村上 京子 (愛媛県)	32
	人生最後の修学旅行	佐藤 彬映 (福島県)	34
	ノクターンと母の詩	村上 通隆 (愛媛県)	36
	円い皺	光嶋 次男 (大阪府)	38
	夕空の下で	入倉 文子 (山梨県)	40
	競馬ごっこ	奥田 益也 (東京都)	42

生きるチ・カ・ラ

瀬戸 桃子（埼玉県）

今年のはじめ、父が余命宣告をうけた。末期ガンでもって半年。明るく、冗談ばかりの父から笑顔が消えた。傍らの母も泣いてばかり。おろおろするばかりの私は、何もできない。

そんな時、娘がこんなことを言った。

「私、じじと文通しようと思う。」

孫十一歳、じじ七十歳。今まで、殆ど交流のなかった二人の文通がはじまった。

娘の手紙には励ましの言葉はない。それでも娘の手紙は、魔法のようにじじの心をつかんだ。じじの好きな音楽やドラマの話。じじの子供の頃の夢の話。娘の将来の夢の話。時には、娘のクラスにいるオネエの男の子の話。

ある時、娘が

「じじの未来の夢はなに？」

と聞いた。もう未来なんてこないと思っていたじじは、返事に困った。けれど、文字で書いているうちに、どんどん楽しくなっていく。

じじの夢は、岡山の田舎でピオーネを作ること。しかし、病気になってから、あきらめていた。手紙を出したその日、じじは岡山へ行った。抗ガン剤治療を受けながら作業することは容易ではない。でも、父の顔には、以前のような笑顔がもどった。

いつしか娘は、じじの返事が待ち遠しくて、ポストを開けたり閉めたりするようになった。じじは、文通が「生きる力。」と言っている。私は大切なものを二人から教えてもらった。

あれから半年が過ぎ、もうすぐ暑い夏がやってくる。

二十通目は、

「二人で、岡山へ行く計画だよ。」

娘が、ニコニコして私に教えてくれた。

最初の思い出・最後の思い出

石原 一志（大阪府）

働いていた遊園地で、大事故が起きた。死者を出し、来園者は極端に減少。メディアは「安全神話崩壊」と毎日のように報道した。

私の担当は、「UFOサイクル」。二人並んでペダルをこぎ、空中散歩を楽しむアトラクション。どしゃぶりの雨の日。カップルが、誰もいない入口に並んだ。「雨が止むまで、こちらでお待ちください。よろしいでしょうか?」「はい。」男性が笑顔で応えた。雨が止むまでは、屋根のあるスタート地点で待機していただく規定になっている。

まだ雨は止まない。

数分の沈黙があつて、女性から切り出した。「なあ、なんでこんなところ来たん?もつとええところあつたやろ!」男性はすこし笑うと、胸ポケットから古い写真を取り出した。「こないだ、実家に帰った時に見つけてん。この時は、高いところが苦手で、よお

泣いとつたなあ。」UFOサイクルに乗り、泣いている男の子の頭に手をあてる女の子が写った写真。「小学校の遠足写真。自分からこれ乗ろつて誘ったのに、怖くて泣き出して、かっこ悪かつてん。覚えてる?」「覚えてるわけないやろ。そんな前のこと!でもこの時くらいから仲良かったつて、なんとなく覚えてる。」

雨が止んだ。

「結婚しよう。」「ええっ!?はあ?..まあ、ええけど、あたしのゆうことは、ちゃんと聞いてや!洗濯も、皿洗いも手伝つてや!お風呂も洗つてな!子どもできたら、子育てもちゃんとしてや!できる?」「おう。」

「雨も止みましたので、そろそろ出発しましょうか!それでは、空中散歩へ、いつてらっしゃーい!」無線を飛ばす。「祝福したいカップルがいっぱいます。お手すきのスタッフはUFOサイクルまで。」数名のスタッフでブーケを作り、帰りを待った。

「おめでとうございます!」静かな園内に祝福の音が響く。女性が涙を流して笑うと、記念撮影スタッフが、シャッターを切った。

二人の結婚式の写真が送られて来た頃、遊園地の閉園が正式に決定した。

賢者のおもてなし

村岡 大二(埼玉県)

二十年以上前に、私が日本料理のお店でアルバイトをしていた時のことです。ある日、女性の方から予約の電話を受けました。

「大人二人と子供の三人でお願いします。」

お歳を召した声に感じましたので、お孫さんといらっしゃるのだらうと思いました。

二日後にそのお客様は、いらっしゃいましたが、私は驚いてしまいました。年配のご夫婦がミニチュアダックスフンドを抱いて、お店に入っていたのです。

私は慌てて、「予約を承ったものですが、ワンちゃんが一緒とは聞いていませんが。」と言うと、奥様は「この子は家族なんです。」

「でも、他のお客様にご迷惑になりますから。」

すると、御主人がか細い声で「ご迷惑だから帰ろう。」とおっしゃいました。寂しそうな声に心痛めていると、奥から女将さんが駆けつけて「お待ちしておりました。可愛いお子さんですね。ただ、お食事中はお子様を抱えていただきたく存じます。」

そう言って離れにお連れしました。

ご予約では、一般席でしたが、機転を利かせて、空いていた離れにお通ししたのです。

ご夫婦は、笑顔に溢れ、楽しそうに食事をされて、ワンちゃんもとても静かでした。奥様が再びいらしたのは、翌月でした。

「先日はありがとうございました。」と申し上げると、奥様は「こちらこそ、あんな素敵な部屋で……。実はあの一週間後に主人は癌で亡くなりました。最後の晩餐になりました。主人は可愛がっていた犬と一緒に最高のおもてなしを受けたことを大変喜んでおりました。本当にありがとうございます。」

私は思わず涙ぐんでしまいました。

素敵なご夫婦の最後の晩餐と、楽しそうなあの笑顔、それを演出した女将さん。千金の重みがある一幅の絵でした。

私は二人から、大切なことを学びました。

ゞばあば三人 安芸の旅ゞ

井上 弘子（愛媛県）

愛媛のばあば三人が、五月中頃列車の旅に出掛けた。高知県安芸市を訪れた時、空は青く鯉幟が揚げられていた。野良時計を見て、近くの広場にやって来た時、鯉のぼりの歌碑を発見した。安芸を童謡の里とした弘田龍太郎氏の曲である。歌好きな三人は、曲を聴こうとスイッチを押したが、あれっ押せない。困っていると一人の男の子が跳んで来て「おばちゃん、それこわれとるよ。」と教えてくれた。「細い棒でやってみたら鳴るかも。」と言うのでしてみたがダメだった。「おばちゃんらこの歌知つとるけん、歌おうわい。一緒に歌う。」と言ってすぐ、ゞ薨のなみと雲のなみ・・・。」と最後まで歌った。その男の子は、少し驚いて聞いてくれた。そして、かわいい笑顔と拍手をくれたのだ。ばあば三人は愛顔になり「ありがとう。」と言って別れた。安芸の地で出会った見知らぬ少年から、でっかい幸せをもらったのだ。松山へ帰って私は、あまりに嬉しかったので一枚の葉書きを書き投函した。「多分、貴校のお子さんと思

いますが、明るく優しい男の子が接してください嬉しかったです。歌まで聞いてくださり和みました。」と感動と感謝の心を届けた。届けたかったのだ。

一か月半程たったある日、封書が届いた。何だろうと不思議に思いながら開いてみた。あっ、あの少年の通う小学校の校長先生からであった。「嬉しい文面だったので、全学年に回覧したところ、該当の子が見つかりました。二年生の男の子でした。『先生たちもみんないい気持ちだったよ。』と伝えると照れていて喜んでいました。『また、安芸に来てください。』と言っていました。童謡の碑も修理が完了しました。』という内容でした。何とありがたいお便りでしょう。私が愛顔になれた一日でした。見知らぬ土地で見知らぬ人同士が出会い、気持ちを伝え合って素直に生きることの素晴らしさを実感したのだ。愛媛のばあば三人安芸の旅は、心の宝となり今も輝いている。

B a d d a y

三好 洋平（愛媛県）

私は中学生の頃、まるで習慣のようにつきもいじめられていた。事あるごとに私の所為にされ、担任の先生に言いたかったが、その後の自分がどうなるかを考えてしまい、相談することができず、時には明日が来るのを恐れていたこともあった。

ある時、私のクラスの先生が、家からミュージックプレイヤーを持ってきて、休み時間に、ある一曲の洋楽を大音量で流し始めた。クラスメイトは、静かに本を読ませて欲しいと言っていたが、音楽好きな私にとっては気にしないどころか、それを楽しみにしていた。それを見た先生は、

「以前はとても落ち込んでいたように見えたが、最近は君の笑顔をよく見ることができて嬉しいよ。」と言った。しかし、私は素直に喜べなかった。すると先生は、

「良いことを教えてやろう。休み時間に流しているあの曲にはな、『今日は本当に悪い日だった。明日に期待しよう』ってフレーズがあるんだ。なぜあんなにも暗い顔をし

ていたのかを言いたくないのなら無理に言わなくてもいい。何か嫌なことがあったのなら、パパっと忘れて笑顔になってみる。そうすれば少しは気分も変わる。」と言ってくれた。それから、いじめられる頻度は変わらなかったが、明日を恐れることはなくなった。

それから二年がたち、高校生になると、私は誰からもいじめられることなく、いじめを忘れるための笑顔ではない本当の笑顔を浮かべられるようになったが、私を救ってくれたあの曲のタイトルを聞くことができず、その先生は別の学校へ異動してしまっただけ、そのことだけが胸に引っ掛かっていた。

つい最近、英語担当の先生が、良い曲を見つけたから聞いてほしいと言って、曲を再生し始めた。『あの曲』だった。私は授業中にも関わらず大泣きしてしまった。あの先生に今なら言える。本当にありがとう。私は今、『悪い日』など無く、笑顔でいます、と。

愛顔で生きてゆく

黒川 康子（静岡県）

三年前の交通事故。都合七回の手術を受ける大怪我。近くに病院がなく、遠い大学病院で治療を受ける事に。激しい痛みとの戦い、辛く寂しい日々。お見舞いに来る人は無く、家族が来られるのも月に二回程度……。所詮他人には理解出来ないだろうと完全に心は孤立し、相部屋の人達に来るお見舞いの人や笑い声に嫌気がさし、ベッドのカーテンを完全に閉めていた毎日でした。ある日、ベッドに横たわって柵ごしに揺れるカーテンを眺めていると突然下から男の子が現れ、私を覗きこむのです。「おねえさん、痛いの？」目を大きくして問いかけます。「うん。スゴく痛いよ。」素直に答えました。するとその子の目は三日月形になり「頑張つてよ。僕が痛いの無くしてあげるからね。」愛顔で言うなり何処かに行ってしまった。一瞬の出来事。暖かい

何かに包まれ、思わず込み上げるものがありました。その後も数回現れ、私を励ましてくれました。

退院の日、隣のベッドの人に男の子に励まされた話をするとう当たりがないとの事。同室の他の人も同様。不思議な気持ちで看護師長さんにその話をする、それは小児病棟のM君との事。M君は難病により長期入院。「将来はお医者さんになって沢山の人の病気を治してあげたい。」度々病室を抜け出しては医者者の真似事をするのだと。直ぐにM君の病室を聞くと、彼は5日前に亡くなったと言われました。涙が止まらず、脳裏にはあの三日月の愛顔が。どんな薬や鎮痛剤より私を穏やかに癒してくれました。愛顔、魔法のパワー。私は今後、自ら進んで愛顔で生きてゆく事をM君に誓います。

まあちゃん

西崎めぐ美（大阪府）

「今から、お前の名前は、千だ！」
ジブリ映画の台詞に、大きな目を更に大きくしていたまあちゃん（次男）の顔を、思い浮かべていました。それは、道後温泉を訪ね、本館前に立った二〇一三年秋の事でした。

次男は、出産時無呼吸となり、歩く事も話す事も出来ませんでした。綺麗な色目にしたたり、楽しい音を聞いたりすると、いろいろな表情を私達に見せてくれました。色白の丸い顔に大きな目。ピンク色の小さな口に長いまつ毛。嬉しくなると、まつ毛がバサバサと動き、満面の笑顔になります。

春。桜の木の下。ひらひら舞い落ちてくる花びらに、ほほ笑み。夏。祭り囃子と蝉の声に、目が大きくなり。秋。色づいた銀杏を見上げ、集めた葉で貼り絵を楽しんだ。冬。降った雪を集め、兄と姉が作った雪だるまをまあちゃんに触らせた。すると、

（ヒュッ）と手をひっ込め、首をすくめ泣き顔に。

一瞬一瞬が、一日一日が、家族の胸に刻まれ共に生きている喜びを感じました。

しかし、十二歳夏。心停止を起こし、一命は取り留めたものの、あの大きな目のまあちゃんには会えませんでした。人工呼吸器を着け、眠るまあちゃんと自宅で最後の時間を重ねる事を決めました。いつも家族の中心にまあちゃんが居て、同じ空間にいるだけで幸せでした。それは、新しい朝を迎える事の幸せをまあちゃんが教えてくれたのでした。

十五歳冬。安らかな幼い顔になり、まあちゃんは天使となって旅立って行きました。「ほらっ！」デジタルカメラを長女が見せました。本館前で映る私達は、どれも笑って目もほほえんでいます。まあちゃんを囲み愛した私達に、愛顔が生まれた瞬間でした。

いつか一緒に来ようと約束した道後。

「見てるかなー」長女が空を仰ぎ、主人と私も、まっ直ぐな視線を空へ。「元気に歩いて行くねー」私が囁くと、風がふわりと通り抜け、三人は目を合わせ愛顔になりました。

それぞれの高校野球

田村 直巳（愛媛県）

「おつかれさん」

高校野球の世界では、最後の大会が始まる前にユニフォームを脱ぐ者たちがいる。自分はその一人である。

野球はチームプレーであり、それぞれの適材適所がある。たとえ実力があってもマネージャーを任せられることもあれば、ポジションを変更されることもある。そして夏の大会が近づいてくると、さらに役割が明確になってくる。その中で自分は、応援団長という役割を、大会一ヶ月前に任せられた。

一人また一人と役割が決まっていくな中、ユニフォームを脱ぐ前日、自分は個人ノックを受けることになった。

「田村、最後の個人ノックだ」

そう言われた瞬間、「ああ、これが最後か」という心残りが生まれた。そうして個人ノック

クが始まり、一球、二球、三球と前後左右に揺さぶられ、呼吸は乱れ、足もろくに動かなくなり、何球受けているのかもわからなくなってきたとき、「頑張れ！」という力強い声が響いた。足元しか見られなくなっていた自分が顔を上げると、そこには三年生を中心とした部員全員が、自分の周りを囲んでいた。

「田村！」「田村さん！」

仲間が自分の名前を呼び、応援してくれていた。練習で体力が尽き、集団から遅れそうになったとき、背中を押してでも、手を引っ張ってでも自分とともに走ってくれた仲間。何度もぶつかり合ったが、誰よりも声を上げて応援してくれる仲間。

「なんだ、試合に出られなくても、自分にはこんなに仲間がいるじゃないか」

全員の顔を見た瞬間、涙とともに心残りは流れ出て、「仲間を支えよう」と決意した。ノックが終わり、最後に監督から

「おつかれさん、これからはチームを支える存在になってくれ」

と言われ、自分は笑顔で、三年間の中で一番の返事で応えた。

生き続ける言葉

大沼 葉摘（東京都）

「駅までご案内しましょうか。」

私の母がかけた何気ない言葉が、私の運命を大きく変えた。

その日はいつにも増して、人通りが多かった。外の寒さから逃れようと、家路を急ぐ人で溢れていたのだ。母と私も例外ではなく、腕をさすりながら横断歩道の信号が変わるのを待っていた。青になり歩き出そうとすると、母が向かいから歩いてきた一人の若い女性に声をかけた。その人は黒い眼鏡をかけて、白杖を持っていた。

母に目配せされ、私は人生で初めて視覚障害の人に腕を貸した。白杖を地面から浮かせるように持ち私の腕を掴む彼女の姿は、信頼されているのだという責任感を生じさせた。私は彼女と何を話せばいいのかわからず、段差や電信柱の有無のみを伝え案内を終えた。

三年が経ち、高校三年生になった私は進路で悩んでいた。昔から医療系の学部に興味があったものの自分の決定に自信を持たず、その日もなんとなく、学校へ向かっていた。駅のホームで電車を待っていると、こちらに向かってくる人の気配を感じた。私が三年前に駅まで案内した、視覚障害者の女性だった。縁を感じた私は勇気を出して声をかけ、終点まで一緒に乗っていくことになった。

話をしているうちに、誕生日が同じであることが分かり一気に距離が縮まった。親近感を覚えた私は、思い切って将来の不安をぶつけてみた。私の話を聞いた彼女はこう言った。「若いのに私に声をかけてくれる、そんな心が優しいあなたは、医療職に向いていると思うわよ。私はあなたの将来が楽しみだわ。」

私は今、薬学を専攻し薬の力で患者さんの病気も心もケアする薬剤師を目指している。これから先、様々な壁にぶつかるだろう。だが、そんな時には彼女の言葉を思い出して挑戦し続けるつもりだ。そして薬剤師の資格を取ったら彼女に報告したい。目にしなくとも伝わるような、満面の愛顔を添えて。

長女の手紙

正岡 智子（愛媛県）

「まほちゃんにお手紙書く！」

そう言って長女は妹に手紙を書き始めました。

私は育児休暇が終わり、明日は初出勤の日です。ブランクのある仕事、家事と育児、それより何より明日の朝、さっそく何時に起きて保育園に連れて行かないと仕事に間に合わないのか……。不安が押しよせてきました。

目の前では長女が書き上がった手紙を字の読めない妹に向かって読み上げているところでした。私は時間のことを考えるとイライラしてしまい、思わず娘たちに「早く寝なさい！」と怒鳴ってしまいました。

娘たちが寝た後で、ふと机の上に置いてあった手紙に目が留まりました。

「まほちゃん、ほいくえんにいくんだよね。ほいくえんはとつてもたのしいところです。先生はいるし、まほちゃんのすきなボーロもほいくえんでるよ。友だちもいっ

ぱいいるよ。一人じゃないからね。なにかあったら先生にいつてね。ほいくえんでめちやくちやたのしいよ。はつねより」

上手ではない字ですが、元気が出そうなカラフルな便せんにとどききハートマークを使いながら書かれていました。そう、私が初出勤ということは、一歳になったばかりの末娘も初登園なのです。長女は小さな妹のことを思い元気づけようと、こんな手紙を書いていたのです。

長女に、人を思う優しい気持ちが生きていることに驚きました。また、楽しい思い出を与えて下さった保育園に感謝の気持ちでいっぱいになりました。私は自分のことしか考えていなかったことを恥じ、怒鳴ってしまったことを強く強く後悔しました。

一か月が経ち相変わらず毎日嵐のような日々です。そんな中、時々長女の手紙を読み返します。末娘だけでなく、私も元気をもらい、たくさんの人に助けられて自分があることを思い出させてくれる、大切な手紙です。

カーネーション

中村千代子（香川県）

五つの冬、母が急逝した。姉はすぐにお嫁に行き、父と兄と私だけの生活が始まった。小学一年生になった母の日、学校で白いカーネーションを貰った。みんなのは赤い。

「千代子ちゃんは、お母ちゃんおらんから白いんで」

先生が優しい声で胸に付けてくれた。セルロイドの白いカーネーション、触れるとガサガサ音を立てた。

「お前、お母さんおらん。お前、お母さんおらん」そう言っているみたいだった。父にも兄にも見せず、納屋の中でワアワア泣いた。

何年生の時だったか、また母の日がやってきた。罰を受けるような気持ちで学校に向かった。

その日も白いカーネーションを貰った。午後になって雨が降り出し、みんなお母さんが迎えに来はじめた。私は、ぼんやり下駄箱の側で外を見ていた。雨の向こうに、腰に縄を巻き、破れた番傘を差した父の姿が見えた。「待ったか？　きれいなカーネーション付けとるのお」

父に見つかってしまった。雨に気を取られ胸からはずすのを忘れていたのだ。

「みんな赤いけど、うちはお母ちゃんおらんけに白いんや」

「白でもええが。父ちゃんおらんやけに」

父が頭を撫でてくれた。どしゃ降りの雨の中、父に手をつながれ家路を急いだ。なぜか悲しい気持ちはなくなり、心の中に笑顔が広がっていった。

今、母の日には、二人の子が赤いカーネーションの花束をくれる。小さい時に白いのを貰い、母となって赤いのを貰える私は欲張りかもしれない。

あの頃、父の日があれば野原の花でも摘んであげたのに……。父は頭を撫でてくれ、大喜びしたことだろう。もう、父はいない。

父ちゃん、私ね、毎日笑って暮らしています。姉ちゃんも兄ちゃんも元気ですよ。

不器用な母の「おもい」

やの ひろみつ（高知県）

私は小学校に入り近所のお兄ちゃんの影響で剣道の道場に通い出した。剣道は想像以上に厳しかった。冬寒くて夏暑い。冬は素足で道場に立っただけで凍り付きそうだった。本当は剣道をやめたかった。でも、母は何事も始めたなら途中でやめる事を許さない人だった。だから、黙って剣道を続けた。

上級生になって、ようやく試合に出るようになった。友達の親はいつも試合に応援に来るが、うちの母は一度も会場に姿を現さなかった。試合後に家族で広げたお弁当がこの上なく美味しそうだった。友人の母は私を気遣ってお弁当を作ってくれた。私は試合で入賞したことがなかった。不器用だった。努力はしているが結果に結びつかない。これはきつと母ゆずりだ！子どもの私から見ても、母は要領が悪く不器用だった。「人はね、真面目に一つのことを続けることが大事なの」母の口癖だった。

ある時、奇蹟が起こった。なんと市の大会で三位に入賞したのだ。初めて貰った賞状とメダル。早く母に見せたくて、防具を自転車にくくって家路を急ぐ。この坂を登りきれば家までは下り坂。ペダルに力を込めた。母は喜んでくれるだろうか。そんなことを考えたら涙が溢れて前が見えなくなった。

「ただいま」近づいてくる足音。「何してるの、早く入んなさい」母の声。おずおずと賞状を差し出すと、母の目はみるみる涙で一杯に。「涙って飛ぶんだね」私の口から出た一言は、思いがけずこんな言葉だった。親子は玄関の前でしばらく泣いた。再び防具をつけて写真撮影会が始まった。こんなにはしゃぐ母の姿は初めてだった。

母よ、実はこっそり試合を見ていたのですね。緊張しいの私があなたの姿を見たら余計に緊張すると思ったんですね。友人がくれたお弁当もわざわざ届けてくれたんですね。すべて、あとから知りました。親になり初めて不器用なあなたの「おもい」がわかる気がします。だって、私は不器用なあなたの「不器用な息子」ですから。

Happy Car

佐々木良子（東京都）

今から八年前、保育園のお迎えに行くために乗っていたのが、この【Happy Car】である。

名前はハッピーでも、屋根もエアコンもカーステレオさえ着いていないフルオープンカー。次男を私の膝の上に乗せ、長男は車いすの後ろに取り付けたステップに立たせる。これぞ我が家自慢の愛車だった。

私が車いすの生活になったのは十年前、夫が長年うつ病を患い、「私がかんばらなくちゃ」と、ひとり張り切り過ぎて体調を崩し、自損事故を起こした。かろうじて一命は取り留めたものの、首の骨を折る重傷で全身麻痺となった。長男四歳、次男一歳のときだった。それから約一年、必死のリハビリのおかげで、自宅へと戻ることができたが、私と入れ違うように夫は家を出て行った。全身麻痺のお母さんと、五歳、二歳の息子たちとの三人暮らしが始まった。日常の生活はすべてヘルパーさんが助けて

くれた。私にとっては母であり、姉のような存在だった。シングルマザーとなった不安より、生きていくことに必死だった。日中訪問看護を受けるため、子供たちを保育園へ預けなければならぬが、嫌がって行くとうとしない。泣きながらヘルパーさんを手を引かれ、家を出る姿に胸が締め付けられた。ここで泣いても何も変わらない。奥歯をぎゅつと噛み締めて考えた。朝送ることはできないけれど、夕方のお迎えなら行ける。泣いている息子たちに約束した。「帰りはお母さんがお迎えに行くからね」と。さっそく車いす屋さんに相談して、ベビーカー用のステップを取り付けてもらった。三人乗りの車いす、子供たちも大喜び。次男を膝に乗せ、長男はステップに。エアコンもカーステレオもないけれど、BGMは三人で仲良く口ずさんだ歌だった。はじめから「できない」と諦めていたら、決して味わうことのできない幸せだった。長男十三歳、次男十歳と成長した今でも、家族の笑顔の真ん中には、いつもこの、自慢の【Happy Car】がある。

「なみだ」の愛顔

森 惇（青森県）

今から十年以上前、たった一度の偶然から僕たちは出会った。初めて会ったときから、君の天真爛漫な姿はとても印象的だった。都会育ちの僕には、田舎で育った君の自然な姿がまぶしく見えた。無垢で明るい笑顔に惹かれた僕は、君と付き合った。

当時から、君は楽観的でマイペースだった。僕はテキパキとデートのスケジュールをつくるけど、君は遅刻の常習犯。悪気のない君の笑顔を見ると僕もつい許してしまっただ。楽観的、悪く言えば「能天気」な君。忘れ物も常習犯。財布も傘もハンカチも、僕がいつも用意してきた。そんな君を僕はよく「イジ」った。あまりに言うから君は、「馬鹿にしてる！」と怒って喧嘩になったときもあった。

そんな僕らも無事結婚したが、災難はすぐに訪れた。原因不明の病魔が突然僕を襲ったのだ。思いがけずに闘病生活となった結婚一周年。僕は泣きに泣いた。自分が情けなかったし、何よりも君との未来に不安を覚えた。僕は日に日にやつれ、鬱病も併発

した。僕は君に何度も「離婚しよう」と言ったが、決して君はイエスと言わなかった。

闘病生活によって、僕の体は衰え、寝たきりとなった。精神は地に墮ち、僕は毎日のように泣いた。その度に君は「大丈夫、きつと良くなる」と僕の手を握って泣きながら笑った。君は病院の先生や周囲の心配をよそに、常に明るく振る舞った。沈んだ家の空気を、独り笑顔で灯し続けた。その頃から、君の楽観は「強さ」だと思うようになった。

僕は君から学び始めた。周囲に振り回されないマイペース、失敗しても自分を責めない考え方・・・僕の沈んだ心は、徐々に君につられて上がっていった。そして病气から五年経った今、軽い散歩ができるまでに回復した。

あの時、泣きながらも笑って「大丈夫」と言ってくれた君がいなかったら、今の僕はいない。愛と笑顔の「愛顔」に僕は救われた。これから返してゆくから、共に長生きしよう。

体温

村上 京子（愛媛県）

「ほうら、すぐ温うなるでえ。」

母はそう言って、大きくてふっくらした股座に、冷え切っている私の両足を挟んだ。ジュワーと温もってくる。温かい。母の、あの体温を忘れない。

子どもの頃の冬は長かった。雪がたくさん降った。よく積もった。家々の軒先には、剣のような氷柱が垂れ下がりが光っていた。「子どもは風の子」だった。群がって遊んだ遊んだ。手足は霜焼けや皸切れになり、いつも赤く腫れていて痒かった。その荒れて冷たくなった手を、校長先生や担任が「お、冷たいのう」と、大きな両手で包んでくださった。擦り擦りしたり押しくら饅頭などして、友と体を温め合った。嬉しくて皆んな愛顔になった。触れ合ったあの体温が懐かしい。

結婚をした。崇高な体温を感じて子どもを授かった。母乳を含ませる。頬擦りをする。抱っこする。負んぶする。何時何処に居ても、子どもの体温を感じながら成長

を楽しんだ。母が私にしてくれたように、私もまた冷え切っている子どもの足を股座に挟んでやる。凍えるような冷たさに、初めて母の愛の深さに涙した。私の体温は、子等の体温と共鳴し共感する。そうして子等は成長し、独立して離れていった。

やがて必然の事のように、私は老いた母の介護と向き合うことになった。認知症になった母の日常は極めて不安定であり、ハプニングの連続だった。私は、母から「かあちゃん、かあちゃん」と呼ばれながら再三、母の体を抱き上げた。母は、枕を並べて休むと穏やかになり、お地藏さまの表情になる。母は私の股座に足を絡ませて喜ぶ。母と娘の体温はよい湯加減になって安らぐ。痩せ細った母の体が悲しくて愛しくて胸がいつぱいになる。母は人生の最期まで、私を体温で包み体温を通して生きる幸せをくれた。

人生最後の修学旅行 〈ありがとう〉

佐藤 彬映（福島県）

四年前の三月十一日。あの日私達の暮らしが百八十度変わった。そう、あの東日本大震災だ。地震直後、空には雪が降った。雪はすぐやんだが、友達と出掛けていた私は、屋内は危険と言われ、七時間以上外にいた。寒くて寒くて、とても辛かった。なにより家族の安否が心配だった。そして、私が寒くて震えている間に、東日本大震災は、津波という大きな傷跡を残していった。家を流し、大切なペット達も流し、そして人間の命をも・・・流していった。連日テレビでは、家族を探し、涙を見せている人達の姿が写されていた。その上、福島県に住んでいる私達に、東日本大震災はもう一つ、傷を残していった。福島原子力発電所の水素爆発だ。爆発後は、「外出を極力しないで下さい。」とか、「海の方の人達はただちに避難して下さい。」とか、さまざまな情報が流れ、私達はただただ従い、混乱するだけだった。

それから一カ月の月日が過ぎて、人々の混乱が少しずつ減ってきた頃、次は風評被害というものが私達を苦しめた。福島から出て、違う学校に転校したら、「放射能がきた。」「汚い」などとイジメられたり、テレビやネットでは福島を批判する言葉が増えたりした。実際に私も、中学校の修学旅行で「福島から来ました。」と言ったら変な顔をされて、とても辛い気持ちになったことが今でも記憶にある。

あれから二年、私は高校生になり、修学旅行で愛媛に行くことになった。また、変な顔をされ、辛い気持ちになるかもしれない・・・。だが、愛媛県の人達は、遠く離れた福島の人達に多額の寄附をして下さり、私達を温かく迎えてくれた。愛媛の高校生と交流した時、みんなと楽しく笑い合えて、とても良い思い出になった。この交流後、愛媛の友達とは今でも連絡をとっている。私は今回、愛媛に行ったことで、人生最後の修学旅行を楽しみ思い出で終えることができた。

愛媛のみなさん、本当にありがとうございます。

ノクターンと母の詩^{うた}

村上 通隆（愛媛県）

私は今治市で映画館を経営する両親の元に誕生しました。母は洋画が大好きで中でも往年の名俳優タイロン・パワー主演「愛情物語」がお気に入りでした。カーメン・キャバレロのピアノ演奏主題曲「トゥ・ラブ・アゲイン」はシヨパン「ノクターン第二番」のアレンジで当時大ヒットしました。私は歯科医師になって愛媛大学医学部に勤務し、病棟で仕事に追われていた私の元へ母が脳梗塞で倒れたとの知らせが入りました。命に別状は無かったものの左半身不随の後遺症が残りました。

それから四年後に県民文化会館でキャバレロのピアノコンサートがあることを知り母と一緒に出向きました。座席に座って演奏が始まる迄に母は入場券の裏に「晴れやかな、かかるところに再びは来ることもなしと思ひ居りしに」と書いて渡してくれました。公演終了後は混雑を避けて最後に会場を出ましたので予約していたホテルに着いたのはかなり遅くなりました。チェックインして部屋に上がろうとエレベーター

に乗っていると後から男性二人が乗ってきました。それは驚いたことにキャバレロとマネージャーだったのです。エレベーターの中で今夜のコンサートへ行ったことを話し、キャバレロ本人からお礼を言われ、母は彼と握手しました。部屋に入ってから母は「頑張って生きていたらこんな奇跡みたいな偶然もあるのね。」と満面の笑みでした。一週間後に母から手紙が届き、感謝の気持ちに先日の奇跡的な出会いを詠んだ詩が添えられていました。私はその詩が書かれた便箋を大切に額に入れて居間の壁に掛けました。

歳月は流れ私は四十七歳の時に脳出血を発症し、利き手を含む右半身不随の障害の為に歯科医師を続けられなくなりました。いっそ死んでしまいたいという絶望感の中から救い出してくれたのは、額の中の母の詩でした。今は両親共に天国に居ますが、壁の額の詩を見る度に母の笑顔を思い出し、生きる勇気を貰って私も笑顔を取り戻すことが出来ました。

規定の字数を超えてしまいますが、もし許して頂けるのなら、是非とも額の中の母の詩を紹介させて下さい。

「三十年あこがれてゐしキャバレロを

吾子につれられ、今まのあたり」

お母さん、ありがとう。

「佳作」

まる
しわ
円い皺

光嶋 次男（大阪府）

「ばあちゃん！おみやげじゃー！」

梅干で天上に穴の開いた弁当箱。ふたを取って見せた。

「こりゃまあ桑の実じゃがな懐かしいのう！もう三〇年以上も前になるかなあ。裏の桑畑にいつぱい実をつけていたもんじゃー」

感慨深そうに、もうこれ以上皺の入れどころのない顔で笑った。私をのぞき込みながら一粒口にしてつづけた。

「何処にあったんかのう？近ごろ目にせんがのう？おーっこの味じゃー この味じゃー！」

もう六〇年以上も昔の話である。明治生まれの『ぬい』ばあちゃんは、おとぎ話を始め二宮尊徳（当時の学校にはどこにもあった銅像）の話を先生よりも面白く話してくれた。

母は毎日野良仕事、末っ子の私は、当然ばあちゃん子で育った。母に手を引かれた想い出など一度もない。またその当時、京阪神から疎開の方がたくさん移住生活されていた。

ばあちゃんは何時も笑顔で子供たちには、わけ隔てなくイモや干し柿などポケットに入れてやった。悪ガキ仲間も「ヌイばあちゃん」といつて寄って来る。お手玉が上手で女の子もばあちゃんを慕っていつも賑やかだった。懐かしい子供の頃の想い出が、いつぱいある。

私が見つ職するその前夜、諭すように言った。

「涙の数だけ大きゅうなる。笑顔の数だけ幸せになる」私には約束の言葉にも聞こえた。

十年後、帰郷の折は、おとぎ話の『魔法使いの婆さん』みたいな顔で、こうも言った。「顔の皺は年輪じゃ縦ジワはおえん、皺も円い皺がええのう。笑顔で暮らしゃなあ皺も円うなるもんじゃー」

そう言われて見れば、ばあちゃんの顔は皺だらけなのに、円い皺が口を囲んでいた。元氣ばあちゃんであったが九十七歳で笑顔のまま来世へとあつけなく旅立った。今、ばあちゃんの歳になって、笑顔の尊さに気がついた。鏡に映る縦皺の自分が、どうも気になる。

夕空の下で

入倉 文子（山梨県）

「ママ、晩ご飯はカレーだよね」

秋の夕暮れ時、丸いほっぺの君はにこにこ顔。私もつれられて笑顔になります。

さてルーを入れようと立ち上がり、肝心なそれを買って忘れていたことに気づきました。近くのお店まで行こうと言うと、ウルトラマンの人形で遊んでいた君は

「ぼく、ウルトラマンとお留守番する」

弟が生まれてしばらくは「みんな、赤ちゃんばかりかわいがる」とすねたり、赤ん坊の小さな手を洗濯ばさみで挟んだり。それも年長さんになってからは落ち着いてきました。

一人で留守番をさせるのは初めてで、少し心配でしたが、

「さすがお兄ちゃん。えらい」

私は赤ん坊をおんぶして家を出ました。

それから十五分ほど。表通りの端っこの石に座ってめそめそ泣いている君がいました。手にはウルトラマンの人形を抱きしめて。

でも、君はひとりではありませんでした。きれいな白髪の女性が、君の手を握ってくれていました。散歩の途中で泣いている君を見つけ、一緒にいてくれたのです。

「ママ、ちっとも帰ってこないだもん」

そう言って泣きじゃくる君を、その人は優しいまなざしで見つづやきました。

「夕方になると誰でも心細くなるのよね」

さりげない言葉がすーっと胸に入ってきました。その時、君が甘えたい気持ちを抑え、お兄ちゃんらしく振る舞っていたことに初めて気付きました。その人は微笑みながら暮れていく空を見上げます。人の心をふわっと包み込むような笑顔でした。

時は飛ぶように過ぎ、泣き虫だった君も、もうすぐ父親になるんですね。

「夕方になると誰でも心細くなる」

還暦を過ぎた今、いっそうこの言葉が身にしみます。未熟な母親と幼子を見守ってくれた人の笑顔を、私はずっと忘れません。

競馬（じっけい）

奥田 益也（東京都）

四十年連れ添った妻に急逝されてからは生きる張り合いをなくし、まったくの無気力状態になってしまった。家にひきこもり滅多に外出もしなくなった。

だが、日がな妻の遺影を見ているうちに、このままでは人間が駄目になると思い、犬の散歩に出るようになった。生前の妻に任せきりだった老犬は、ためらうようにながらもよたよたと後からついてきた。

夏は朝六時に家を出た。老犬の歩くペースは歯痒いくらいに遅い。じきに老老介護になるかもな。妻に冗談をつぶやき、笑ったりもした。そうでもしないと寂しさに押しつぶされそうになった。

そんなとき、近くの団地の前庭に屯ろする老人の一团を見るようになった。チラッと横目で見ると、競馬新聞を手に、「ホラ、大当たりだろ」「あーあ、ボロ負けだ」と、ワイワイ騒いでいる。朝っぱらから競馬とはイイ気なもんだ。苦々しい思いで何度

かやり過ぎたあと、その中の一人が声をかけてきた。一瞬「まずいな」と思いながら立ち止まると、老人は新聞をひらひらさせながら言った。

「お宅の奥さんもそのワンちゃん休ませて、これやったことあったよ」

「エッ！女房が競馬？まさか」

「なに、馬券買うんじゃないやなくて、勝ち馬の当てっこして駄菓子やりとりするだけの話。お宅の奥さん、勘だけを頼りに勝ち逃げするのが上手かったよなあ」

言われてみれば、「これいただき物よ」と煎餅や飴玉をズロツと出したことが何度かあったつけ。老人たちに混じり競馬ごっこに夢中になっている姿が目に見え、思わず声を立てて笑ってしまった。老人たちも笑った。

「この歳になって友だちが沢山できたよ。君がいなのは寂しいが、生きてはいけるよ」

妻の遺影に、そう語りかけるようになった。

選考委員



新井 満（審査委員長）

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。

2005年、『この街で』（作詞：新井満、作曲：新井満、三宮麻由子）を制作。

2007年、『千の風になって』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。

2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。



神野 紗希（審査委員）

1983年愛媛県松山市生まれ。2001年、松山東高等学校時代に第四回俳句甲子園にて団体優勝、「カンバスの余白八月十五日」が最優秀句に選ばれる。

2004年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞を受賞。

2006年から、6年間、NHK『俳句王国』司会を担当。現在、明治大学兼任講師。

中村時広（審査委員）

1960年愛媛県松山市生まれ。

1982年三菱商事株式会社入社。

1987年愛媛県議会議員。1993年衆議院議員。

1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。

2010年愛媛県知事。2014再選、現在2期目。

えがお
愛顔感動ものがたり

＼800字の感動を愛媛から＼

(平成二十六年愛顔感動ものがたり発信事業)

平成二十七年一月発行

発行 愛媛 県

企画振興部地域振興局

文化・スポーツ振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一―二

TEL (〇八九) 九一二―二九七二

印刷 不二印刷株式会社

〒七九〇一〇〇五四

松山市空港通二丁目一三―三〇

TEL (〇八九) 九七三―一二六六

